

2016年3月27日 礼拝メッセージ

聖書：ヨハネの福音書 21 章 1～14 節

説教：さあ来て、朝の食事をしなさい

はじめに

今日は主のよみがえりをお祝いするイースター礼拝となっています。そのよみがえりについてパウロは、「もしキリストがよみがえらなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです」(第一コリント 15 章 17 節)と言っています。

お恥ずかしい話ですが、私が洗礼を受けたとき、実を言うと主がよみがえられたということは信じられないままでした。とにかく、この方は私の罪のために十字架で死んで下さった、そこだけ信じて受洗したのです。もしかして、皆さんの中にもかつての私のような思いを抱いている方もいるかもしれません。死んだ者が生き返る、理屈で考えたら絶対にあるにないことです。

日本には怪談話というものがあります。理不尽な理由で殺されたり、死に追い込まれた者が、殺した相手に夜ごとお化けとなって出てきて、恐ろしい声色で恨み辛みを語り、相手を狂い死にさせる。そんなストーリーです。イエスもよみがえったのではなく、化けて出てきたということでしょうか。確かに、イエスは弟子たちを恨む理由が十分にあります。死んでもついていきますと言っていた弟子たちに、いざとなったら見捨ててしまった訳ですから。

では実際はどうであったのか。ヨハネの福音書を開いて見て参ります。

1 テベリヤ湖畔

1) 岸辺に立つイエス

1 節にある「テベリヤ湖畔」はいったいどこにあるのかと思うかもしれませんが、ガリラヤ湖と言った方が皆さんにはなじみがあるでしょう。同じ湖です。先日のイスラエル旅行で、ガリラヤ湖に私も行ってきたばかりですので、少しお話しします。大きさは支笏湖よりもひとまわり大きく、湖の周囲は丘に囲まれています。ちょうど洞爺湖の雰囲気と似ているかもしれません。ちょうどこの湖のすぐそばにあるホテルに宿泊しましたので、湖畔に立って朝日の昇るのを見ることができました。その風景を眺めながら、4 節の「世が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた」を思い起こしました。風もなくおだやかな湖面でした。湖畔を歩くとおびただしい数の野鳥の声が聞こえてきました。二千年前のイエスもここに立ったのだろうかと思うとなんだか不思議な気持ちになりました。

2) その夜は何もとれなかった

ここに登場する弟子たちは、もともと漁師として働いていた人たちです。先週は、イエスがオリーブ山で逮捕される場面を見ました。その後イエスは裁判にかけられ、十字架で処刑されてしまいます。それが金曜日でした。それから三日経った日曜日の夕方のことです。弟子たちは人々を恐れて家の中に隠れていたのですが、そこへよみがえられたイエスが現れて下さり、弟子たちは大喜びはしたようです。ところが、すぐにイエス・キリストを宣べ伝えようという話にはならなかつ

た。今までは、言わばイエス教団の先頭を切ってがんばってきた弟子たちですが、もう活動を止めることにしたようなのです。そして、シモン・ペテロが何人かの他の弟子たちに声をかけ、故郷に戻ってまた漁師として働くことにします。

子どもの時から慣れ親しんだガリラヤ湖です。漁師としていつどこに網をおろせば魚がとれるか、目をつぶっていてもわかる自信がありました。漁師ならば何とか暮らしていけると思ったでしょう。ところがその日はなぜか夜通しががんばったのに何もとれません。

3) 船の右側に網をおろしなさい

こんな時どんな気分になるでしょう。皆さんも経験があるでしょうが、不機嫌になって仲間とも口をきかなくなります。白々と夜が明けてきました。もう今日はもう切り上げようと思ってふと岸の方を見ると誰かが立ってこちらを見えています。「子どもたちよ。食べる物がありませんね」と声をかけてきた。こんな時は、弟子たちの耳にはどんなことばを聞いても批判されているように聞こえます。おそらく心の中でむっとしたでしょう。そんなことにはお構いなくイエスは続けて言います。「船の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」

普通、わきで見ている人からちょっかいを出されることほど頭に来ることはありません。そもそも、当時、複数の船がいつしよに漁をする場合は網がお互いに絡み合わないように、船の左側に網をおろすのが習慣となっていました。イエスはそのしきたりを破って右側におろせというのですから、ますますかちんときそうなものです。それなのに、弟子たちは岸辺に立っている見も知らない

男の声に従う気になりました。なぜでしょう。

2 「主です。」

1) 前にも同じことが(ルカの福音書5章5～11節)

これと同じ場面、以前にもありました。今日の箇所が出来事からおよそ三年ほど前、イエスがまだひとりで宣教されていた時のことです。イエスはシモン・ペテロに声をかけ、船を湖に出して網をおろしてみなさいと言われたことがありました。ペテロは、「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。」と一旦は言い訳するのですが、「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう」といやいやながら従います。そうしたら思いがけなく大漁で、仲間を呼んでやっとなを上げます。そこにはゼバダイの子であるヤコブやヨハネもいた。つまり、今日の箇所に登場する弟子たちがそこにいたことになります。

あの三年前の朝の出来事を真っ先に思い出したのは、イエスの愛された弟子あったと書かれています。名前を明かさないのは、ヨハネの福音書を書いたヨハネであったためだと言われています。彼は船の上で叫びます。「主です。」あそこに立っておられるのはよみがえられた主である。

2) シモン・ペテロの行動

それを聞いてすぐに反応したのは、シモン・ペテロでした。彼はすぐに上着を着て湖に飛び込みます。いったいなぜ彼はこんな行動をとるのでしょうか。イエスに一刻も早く会いたいからでしょうか。でも、彼は漁師ではないですか。6節に「おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかつた」と

あります。仲間が困っているのに自分だけさっさと湖に飛び込んでイエスに会いに行く。いかにもペテロらしいと言えなくもないですが、少し自分勝手すぎはしないでしょうか。

本当にイエスに会いたかったのでしょうか。むしろ話は逆で、イエスに顔を合わせる事が出来ない、それで湖に飛び込んだということではないでしょうか。そのように考える理由があります。やはりあの三年前の朝の出来事と関係しています。三年前、ペテロが不承不承に網をおろしたところ、思いがけなく大漁となります。そのとき、ペテロはなんと言ったか。主の足もとにひれ伏してこう言った。「主よ。私のようなものから離れて下さい。私は、罪深い人間ですから。」(ルカ5章8節) どうしてあのかときペテロが自分は罪深い人間だからと告白したのか理由はわかりません。とにかく驚くべき奇蹟を見たので、自分でも訳がわからず、目の前にいる方がどんな方であるかもわからず、とにかく思わず口から語っただけだったのかもしれない。

しかし今はどうですか。三年前の朝、告白したことば。「私は、罪深い人間ですから。」自分が語ったことばがどんな意味であったのか、今は心からわかるのです。イエスが十字架におかかりになる前、自分はなんと言っていたか。「主よ。あなたのためにはいのちも捨てます。」イエスがペテロに「鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたときでさえ、そんなことは絶対にしないと言い張っていたのです。それがどうなったか。イエスが裁判にかけられているとき、その事が気になってこっそりと庭に忍び込んで様子を伺っていたら、「おま

えはイエスの仲間ではないか」と言われて、とつさに口から出たことば。「私はそんなものではない。」ペテロは、それを三度くり返してイエスを見捨てていったのです。

今自分が見捨ててしまったイエスが目の前に立っておられます。こんな時普通なら、「どの面(つら)下げて来たんだ」と怒鳴られるところです。ペテロにはそれが痛いほどわかる。だから恥ずかしくて湖に飛び込むのです。

3 「さあ来て、朝の食事をしなさい」

1) 私たちを赦し、迎えるためによみがえられた

他の弟子たちも事情は同じです。彼らだってイエスを見捨てて逃げた口ですから、合わす顔がない。非常に気まずい雰囲気です。主であることはわかったけれど、「先生。おはようございます」なんて口をきけません。そんな彼らに救いの手を差し伸べたのはイエスの方です。過去のことをねちねちと責め立てたりはしません。ただ、弟子たちがいますぐに出来ることを語ります。10節。「あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。」それ以上言わなくても、この一言でイエスが弟子たちをお赦しになっていることが伝わりました。ペテロがやはり真っ先にイエスのことばに応答し、網を陸地に引き上げ、魚をイエスのところに持って来ます。

イエスは言います。12節。「さあ来て、朝の食事をしなさい。」

日本の怪談話で言えば、イエスは弟子たちを恨む理由が十分にあります。弟子たちに恨み辛みを言うために化けて出てきてもよさそうなものです。ところが聖書は違う。自分を見捨てた弟子たちを赦すために、イエスは

よみがえられたのです。朝の食事に招いて、一緒に食事を楽しむためによみがえられました。

2)たとえ今は信じられなくても主は待っておられる

死んだ者がよみがえるはずはない。いや、イエスは神の子だからできただけで、私たち人間はよみがえるはずがない。そんなふうに、よみがえりを信じなさいと言っても、かつて私がそうであったように信じらるのは難しいと感じるかもしれません。

でもこれだけは言えると思うのです。今は信じられなくてもいいのです。でも、私たちはいつか死ぬときが来ます。自分が死ななくても、愛する家族が、愛する友人が死ぬというときがやって来ます。自分が死ぬ。愛する者が死んでいく。その時どうしたらよいのでしょうか。死んだら終わり。そこには絶望しかありません。そこで終わりです。どんなに悲しくてもあきらめるしかない。

しかし私たちは、そこで終わらなくてよい。まだ望みをもってよい。聖書には何と書いてあったか。死んだ者がよみがえると書いてあった。私たちの主は、死からよみがえられた。それまでは信じられなかったかもしれないけれど、私たちは信じていいのです。死が目前に迫っていても、私たちには希望がある。

主はどこに立っておられましたか。弟子たちが、何もとれないと絶望していた湖のほとりに立って待っておられました。私たちはそこでよみがえられた主にお会いすることになります。